



やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

節目をつくり、区切りをつける

学校にはいろいろな「式」がある。とりわけ大切な行事として、子どもたちと先生たちが心をこめ、盛大に催すものとして「入学式」と「卒業式」がある。これらは、学校という場への入り口と出口という節目を、二度とない大切なものとして、みんなで盛り上げていこうという行いだ。これに続くものは、学年度と学期の初めと終わりに行う「始業式」と「終業式」となる。ただし、終業式の場合は、3学期であれば在校生は「修了式」となる。

この他に、教職員が新たに着任、転任したということで、年度はじめに、「着任式・赴任式」が行われ、転出、退職する年度末には、「離任式」が行われる。（※今年度末からは、離任式が廃止となっております。）

こうした重々しい儀式のほかに、何か新しく施設ができたり、取り壊されたりするときにも、お披露目や歓迎、送別の式典を催すこともある。

いずれも一種の儀礼である。1時間の授業のはじめとおわりに、「礼」をするように、その前後に区切りをつけ、互いの気持ちを切り替えようということだ。人であれ事物であれ、組織をあげて迎え入れたり、送りだしたりすることで、一人ひとりの生活、心のありように節目、けじめをつけて、その後の歩みをさらにしっかりとさせたいという願いがこめられているとも言える。

儀式が大きく、盛大になればなるほど、また、参列者の思いが重ねられ、刻まれていけばいくほど、その儀式を終えた瞬間、そこに出席した者は一様に、「もう、もどれない」といった心境になる。そして、お世話になったことへの感謝の気持ちをことばにしてみたり、確かめ合ったりもすることがある。参列した者は、儀礼を通過したという共通の体験によって、仲間意識も芽生えてくる。

子どもたちには、本日の修了式で、「帰ったらおうちの人に、一年間いろいろとお世話になりました、ありがとうございましたという気持ちを伝えなさい。」と説いた。せっかくの節目である。これを自身が成長できる格別のチャンスにしてほしいと願ったからだ。ぜひ、家庭でできるようになったことを認めたり、励ましたりしながら、それぞれの思いをかたちにあらわし、子どもたちをさらに力強く支えてもらいたい…そう願っている。

この一年間、矢倉小学校にたくさんのご支援ご協力を頂きましたこと、保護者の皆様、地域の皆様に心から感謝申し上げます。ありがとうございました。 学校長 大林 道範